

新出の行瑫『内典隨函音疏』に関する小注

高田時雄

はじめに

二〇〇九年秋北京のオークションに、行瑫『内典隨函音疏』卷二百六十四の金粟山藏經寫本一軸が出品された。そのことは當時刊行された圖録¹によって知ってはいたが、そこに掲載された圖版は若干鮮明度を欠き、小字の判讀は困難だったため、これのみでは詳しいことは分からなかった。色々関係者にも訊ねてみたが、偽物だという人もあり、一度すべてを見てみたいという思いは一層強くなっていた。ところが、筆者が二〇一〇年秋から二〇一一年初めにかけ、北京に滞在中、幸いに中國國家圖書館の李際寧氏の仲介によって現所藏者からこの經卷の寫眞の提供を受けることが出来た。行瑫『音疏』については、筆者は嘗て一文を草し²、さらに最近にもこの新出資料を含めて新しい材料について若干觸れたことがある³。いまこの卷二百六十四を鮮明な畫像によりつぶさに觀察することが許された機會に、改めて註釋を加え、行瑫『音疏』について現時點で分かる事柄を整理しておきたいと思う。



圖 1: 題簽

オークションに出現した寫本は、その題簽に「唐人寫中阿含經音釋 過雲樓鑒藏 第〇〇〇式号」とある（圖 1）。

過雲樓とは清代蘇州の收藏家顧文彬（1811-1889、字は子山）が文物書畫を収めた

¹北京德寶國際拍賣有限公司による二〇〇九年秋期拍賣會「佛教文獻專場」の圖録。フルカラーの豪華な精裝本で、表紙の中央に「寶藏」と印刷してある。國家圖書館の趙前氏が「說說顧氏過雲樓舊藏的一件《金粟山大藏經》」、故宮博物院圖書館の翁連溪氏が「吉光片羽——宋人寫金粟山大藏經零卷」を寄稿している。

²「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」『中國語史の資料と方法』（1994 年、京都大學人文科學研究所研究報告）、109-156 頁。

³「藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏」『敦煌寫本研究年報』第 4 號（2010）、3-4 頁の注 10。

所で、その豊富な收藏はかつて“江南第一家”と稱された。卷末に鈐される「元和顧子山秘笈之印」「過雲樓收藏金石圖書」の藏印はまさしく顧文彬のそれである（圖 2）。

寫本の流傳と現況

顧家では善本書などは家憲により特に秘して見せなかったと云われ、保存状態は極めて良好だとされる。解放後の一九五一年、五九年に、法書名畫など 308 點が上海博物館に寄贈されたほか、九十年代に南京圖書館がその善本 541 種を購入、近年では二〇〇五年春に北京の嘉德会社が、宋版『錦綉萬花谷』40 冊など過雲樓の藏書 178 部の賣り立てを行い評判となったことがある。但し今回のこの經卷は顧氏の過雲樓を出た後、「流落海外數十年」⁴であったと解説されているので、比較的早い時期に海外に流出していたものと思われる。筆者が國家圖書館の関係者から聞いたところでは、海外とはイギリスだというのが、詳しいことは不明である。ちなみに顧氏には『過雲樓書畫記』（光緒八年）があり、孫の顧鶴逸⁵（1865-1930）にも『過雲樓書畫續記』⁶があるが、ともに本卷は収録されていない。さらに民國元年に傅增湘が怡園を訪れ、その時の記録に基づいて作ったとされる『顧鶴逸藏書目』⁷にも見えないことからすれば、顧家を出た時期もかなり早いのかも知れない。

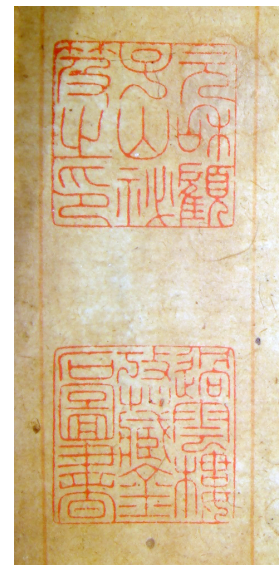


圖 2: 顧氏印記

この經卷は現在卷子本に仕立てられているが、趙前氏もすでに指摘するように⁸、寫本の折り目から判断して、この經卷はもと卷子本であったものが、ある時期に折り本に改裝され、さらに清代に再度卷子本に仕立て直されたものと判断される。題簽に「唐人寫」と稱するのはもとより誤解で、金粟山藏經は今日一般に宋代、それも十一世紀半ば以降の書寫であることが分かっている。

⁴趙前「說說顧氏過雲樓舊藏的一件《金粟山大藏經》」。

⁵本名は麟士、西津漁夫、鶴廬主人などと號した。蘇州の怡園を據點に、書畫の同好を集めてサロンを主催した。また鑑識にも優れ、先祖の收集を更に豊かにしたと傳える。

⁶『過雲樓書畫記・續記』1990 年、江蘇古籍出版社。

⁷『北平圖書館館刊』第 5 卷第 6 號（民國 20 年 11、12 月）、81-96 頁。傅增湘と顧鶴逸の交遊については、劉薈「蘇州顧鶴逸藏書考」『中國典籍與文化』1998 年第 1 期、82-87 頁、を参照。

⁸趙前前掲文。



圖 3: 卷二百六十四の全姿

本文は黄染紙に朱で界線を施し、墨色ひときわ鮮やかに端正な楷書で書寫されている。京都國立博物館の行瑠『音疏』と全く同一の風格をもつ、典型的な金粟山藏經の一である⁹。この一卷は『中阿含經』全六十卷のうち第四帙、すなわち卷第三十一から卷第四十のテキストに對する音義で、本文中には卷三十一以下それぞれ行を改めて卷數の標示を行ってある。いまその卷數標示の部分だけを列舉すると、「卷第三十一」「第三十二卷」「第三十三卷」「第三十四卷」「第三十五」「第三十六」「三十九卷」「第四十」となっていて、奇妙なことに卷三十七、卷三十八が脱落している。ではこの二卷には音義が附されていなかったのかというとそうではなく、実際には「第三十六」のあと「三十九卷」の始まる前に、卷三十七、卷三十八に對する音義が挟まっている。要するに卷數標示が抜け落ちていただけのことだが、寫本の體裁がいかにも堂々たる割には、こうした杜撰な面が見られることは面白い。

いずれにせよ本來「五百許卷」あったとされる行瑠『音疏』は今日もはや完帙を傳えない。その原姿をとどめる金粟山藏經本にしても、これまでただ京博本しか知らなかったが、この經卷の出現により更に一本を加え得るのは幸いと云うほかない。

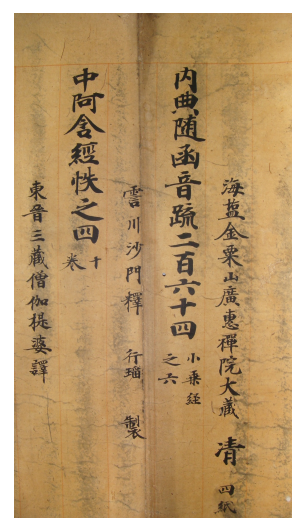


圖 4: 卷首

行瑠『音疏』 卷二百六十四の出現と現存諸本

我が國には早く行瑠の『隨函音疏』が傳わっていたことは、目錄の記載や他書に引用されたものなどから知られるが、纏まったかたちで今日に傳わったものはない。これまで知られている限り、行瑠『内典隨函音疏』の現存諸本は以下の通りで、すべて日本に存在するものだが、それぞれ傳存の背景はかなり異なる。

⁹圖 3 を参照。この圖は注 1 に挙げた拍賣圖錄から採った。

- 卷三百七『摩訶僧祇律』（金粟山藏經本、守屋孝藏舊藏、現在京都國立博物館）
- 卷四百八十一（不全）『大威力烏樞瑟摩明王經』等（大谷大學所藏高麗藏に附屬）
- 卷四百九十『大乘理趣六波羅蜜多經』（同上）
- 卷一至四、八至十一（不全）『大般若經』（西大寺藏磧砂版藏經に附屬）
- 卷次不明（不全）『琉璃王經』等（法帖仕立、東京大學東洋文化研究所藏）¹⁰

大谷大學及び西大寺の本は、兩者ともに大藏經の卷末音義のかたちで附録されたもので、大藏經から獨立したものではなく、中國、朝鮮から我が國に輸入された時にすでに附いていたものである。特に大谷大學の高麗藏は貞元錄による續入部分に附けられた音義で、大谷本に限らず古く舶載された高麗藏はみなこうなっていたらしい¹¹。では高麗にも行瑫音義の完帙が傳わっていたのかというとそうではなく、中國からこれら續入經が輸入されたときに附載されていたものが、未整理のためにたまたま残ったものと考えられる。ただ驚くべきことは、この部分の版本そのものが最近韓國で發見されたことである¹²。海印寺に所藏される國寶高麗八萬大藏經の版本とは別途に保存されてきたことを考えると、ある時期に整理を経て抜きだされたものと想像される。刊本大藏經の卷末に附載されている事實は、行瑫『音疏』が一般的に藏經と一具のものとして傳わったものであることを推測させる。南方の藏經の音釋はもと字函ごとに一卷（或いは一帖）の獨立した音釋を添えるかたちであったが、後に毎卷の末尾に分割して載せるようになった。いわゆる卷末音釋の形式である。偶々大谷大學ほかの高麗藏に残った『音疏』は帙ごとの形式を保存しているものの、西大寺の磧砂版藏經では行瑫『音疏』を卷末音釋の形式にしてしまっている。その意味では、これは行瑫『音疏』のナレノハテの姿と云ってもよい。

¹⁰10 年ばかり前、東京大學で佛教文獻の古寫本刊本の展覽會が開催され、その折りにこの本も出品された。筆者はその時のパンフレットに「行瑫『内典隨函音疏』（十世紀前半成書）殘卷、帖裝一冊、浙江省海鹽縣金粟山廣惠禪院藏經本（十一世紀後半）、南海伍元蕙舊藏、東方文化學院東京研究所を経て現在東京大學東洋文化研究所所藏。五代時期に江南で作られた一切經音義の一種で、これは琉璃王經一卷と五苦章句經一卷に對する音義部分のみの殘卷である。京都國立博物館の守屋コレクションに、同じ金粟山藏經から出た「摩訶僧祇律」の部分（卷三百七）の卷子本が所藏されている。」と解説しておいた。『東京大學所藏佛教關係貴重書展——展示資料目録』、平成 13 年（2001）東京大學附屬圖書館、8-9 頁。

¹¹高田「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」127 頁。

¹²高田「藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏」3-4 頁、注 10。

金粟山寫本の行瑫『音疏』が依據した藏經

さて新出の『中阿含』や京都國立博物館の『摩訶僧祇律』など金粟山藏經本の『音疏』は、古い形式を備えたもので、それぞれの字帙（或いは字函）に獨立した一卷（或いは一帖）の音義が附屬されたのである。これら二卷の例では、卷頭にまず「海鹽金粟山廣惠禪院大藏」と書いた下に、大きく千字文の帙號（函號）（『中阿含』では「清」、『摩訶僧祇律』では「登」）を表示し、更に○紙というふうに『音疏』の使用張數を書き記してある。『中阿含』では四紙、『摩訶僧祇律』では十五紙となっている。この方式は元はといえば行瑫が會稽の大善寺藏經に基づいて撰述したそのまの形式を保存している筈である¹³。ただ行瑫『音疏』を金粟山藏經の附載音義として採用するに當たって、それにあわせて形式上の統一を圖ったものである。

いずれにせよ卷首に記入された千字文番號によって、音義の依據した大藏經が如何なるものであったかの推測が出来るわけであって、今、下に述べる東京大學東洋文化研究所の法帖仕立ての『音疏』も含めて表にすると以下ようになる。

	行瑫	隨函錄	略出	麗藏
中阿含經 60 卷	夙興溫清似蘭	夙興溫清似蘭	薄夙興溫清	履薄夙興溫清
摩訶僧祇律 40 卷	登仕攝職	登仕攝職	優登仕攝	學優登仕
琉璃王經等	(定)	定	安	辭

『隨函錄』は五代後唐の僧可洪が、河中府（今日の山西省蒲州）の延祚寺藏經を底本として編述した音義で¹⁴、行瑫とほぼ同時代のものである。可洪は北方、行瑫は南方の代表と見て差し支えない。また『略出』は『開元釋教錄略出』で、千字文番號を附した經錄として最も古いものだが、その函號は實は江南に行われた藏經のシステムに據っているとされる¹⁵。最後の高麗藏は、いわずと知れた開寶藏系統の代表として挙げる。さて表に見える『千字文』の文字の前後は「臨深履薄、夙興溫清、似蘭斯馨、如松之盛、川流不息、淵澄取映、容止若思、言辭安定、篤初誠美、慎終宜令、榮業所基、別紙藉甚無竟、**學優登仕、攝職從政**」の如くである。つまり行瑫『音疏』と可洪『隨函錄』は一致するが、『略出』及び高麗藏ではそれぞれ一字ずつ（したがって高麗藏では二字）のズレが生じていることが分かる。これは竺沙雅章氏の提唱された漢譯大藏經の三つの類別に符合するするものだが、行瑫と可洪が完全

¹³ 行瑫は後唐の天成年間（926-929）に會稽の大善寺に來たって『音疏』の撰述に従い、廣順二年（952）にこの寺でその生涯を終えた。上掲高田「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」124-125 頁を参照。

¹⁴ 長興二年（931）に編纂を開始し、清泰二年（935）に草稿を完成、續いて淨書にかかり後晉の天福五年（940）に擲筆した。高田「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」118 頁。

¹⁵ 竺沙雅章『漢譯大藏經の歴史』（平成 5 年、大谷大學）7-8 頁。

に一致することは、宋代以前の中國では南北を問わず各寺院の藏經が均一のシステムを持っていたことを明らかにし得る點で興味深い。

『隨函音疏』 卷二百八十八

さて上に觸れた東洋文化研究所に所藏される折帖仕立ての『音疏』は、新出の『中阿含經』に對する『音疏』が卷二百六十四、既知の京都國立博物館所藏『摩訶僧祇律』の『音疏』が卷三百七であったことから順序を辿っていくと、『琉璃王經』等の音義を収めるこの一帖が、實は大藏經の定字帙¹⁶に對する音義であり、『隨函音疏』ではその卷二百八十八であったことがわかる。残念ながら法帖の常として界線ぎりぎりの位置でばらばらに斷裁してあるために、多くの情報が缺落していることは如何ともしがたい（圖5）¹⁷。特に經題は『琉璃王經』『五苦章句經』二經のものしか保存されていないが、音義そのものは同帙の他の經卷にも及んでおり、また四行ごとに切斷された斷片の順序にも混乱が見られるようである。そこでこの折帖の構成についてやや詳しく検討を

加えておきたい。この折帖は、四行ごとに切斷して一面としているが、それが全部で十三面ある。ただし最後の面は二行だけなので、行數としては合計五十行となる。上述のとおり、經題は第一面の『琉璃王經』と、第五面の『五苦章句經』が見られるのみである。しかし逐一經文と引き比べてみると、音義の掲出語はこれら二經に現れないものが少なくない。先ず問題のないものから片付けてしまうと、『五苦章句經』の經題を備える第五面から第十二面までは、すべてこの經の音義であることは間違いない。順序もまた正しく配列されている。しかしながら第一面の『琉璃王經』の音義を見ていくと、第二面の第二行「弥_{同用}」に至って、音義掲出字が經文中に檢出し得なくなる。實はここから第四面までの音義は、『琉璃王經』ではなく、『禪秘要

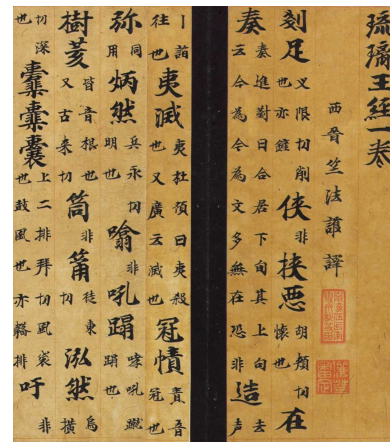


圖5: 『音疏』卷二百八十八

¹⁶ この定字帙には『開元釋教錄』によれば、『禪秘要法』等十五經十七卷を収めていた。

¹⁷ ちなみに現在この寫本の全文は、東京大學東洋文化研究所所藏漢籍善本全文影像資料庫の「1486 琉璃王經音義一卷 唐鈔本」（貴重-56）として見るできるので、参照されたい。ただしそこに唐鈔本というのはもとより誤りである。ここには同研究所の許可を得て、最初の部分を掲げておいた。

法經』¹⁸に對する音義なのである。第二面第一行と第二行のあいだを諦視すると、正しくここで紙を繼いであることが分かる。またこの事實は下界線がこの部分で僅かにずれていることによっても確認できる。おそらく原件を見れば一目瞭然であろう。

ではなぜこのようなことになったのであろうか。『開元釋教錄』卷二十小乘入藏錄によると、定字帙に収める經典は以下の通りであった。

禪秘要經三卷

七女經一卷

八師經一卷

越難經一卷

所欲致患經一卷

阿闍世王問五逆經一卷

五苦章句經一卷

堅意經一卷

淨飯王涅槃經一卷

進學經一卷

得道梯橙錫杖經一卷

貧窮老公經一卷

三摩竭經一卷

萍沙王五願經一卷

瑠璃王經一卷¹⁹

『禪秘要法經』を含めた問題の三種の經典はすべて同じ定字帙に含まれているので、行瑠『音疏』卷二百八十八を裁斷してこの帖を調製したとき、こういったことが起こるのは充分あり得ることであろう。ただ卷二百八十八がもと何紙から成っていたかは分明しない。少なくともこの帖に貼り込まれた五十行は行瑠『音疏』卷二百八十八の全部ではあり得ない。しかも最初の部分の缺落していることは容易に想像できる。他の例から判斷して、卷首には圖4と同一の體裁を備えていなければならないからである。おそらく卷二百八十八は裁斷されて幾つか複数の法帖に仕立てられたのであり、その際卷首は別の帖に貼り込まれてしまったのである。いずれにせよこの帖は卷二百八十八の全部ではない。

また最後第十三面の二行はどこから來たものかも考えておくべきであろう。こ

¹⁸ 『開元錄』では『禪秘要經』に作り、「或云禪閼要法」と注する。『隨函錄』では正に『禪秘要法』と稱してある。ここでは便宜上大正藏の經題を用いる。

¹⁹ 『開元錄』はこのように作り、「或作流離字」と注する。

の部分も直前の第十二面『五苦章句經』にはうまく接續しないのである。そこで調べてみると、これは第四面（つまり『禪秘要法經』の音義）に續くものと判明した。第四面第四行には「嬌裊、脆裊」という二つの異體のペアを掲げて、これに「非」と注した上で、正體の掲出字としては「萎菖」を出し、「邑音」と注してある。一方、第十三面の初行は割注のかたちで「一菸蔦損茹熟」と書かれてある。「一菸」の部分は恐らく「菖菸」と讀ませるつもりなのであろう。『廣韻』入聲緝韻の「菖」字注に「菖菸、茹熟」とあるのを見れば、この注が「菖」字に對するものであることは明らかで、したがって第十三面の二行は第四面から續いていることを知り得る。ちなみに『隨函錄』では『禪秘要法』下卷の音義に「萎姬」を掲出し、「上於垂反、下奴果反、正作姬姬、嫫姬弱貌也」と注する。『音疏』と『隨函錄』の解釋が異なるのは興味なきにしもあらずだが、今はそれに立ち入らない。ここでは『隨函錄』に據っても、この部分の接續することを確認し得ることを示せば十分である。

この帖に含まれる經典は『琉璃王經』『五苦章句經』『禪秘要法經』の三種に盡きることが明らかとなった。では『音疏』でもこれら三種の經典は接續して列んでいたのであろうか。餘計な事柄とも云えるが、些か氣になるところである。上掲の通り『開元錄』ではそれぞれ離れているのである。そこで『隨函錄』を見ると、その定字帙は、『禪秘要法』以下の十五經十七卷が収められていることは同じでも、その順序がかなり異なっている。

禪秘要法三卷

越難經一卷

所欲致患經一卷

阿闍貫王門五逆經一卷

進學經一卷

得道梯橙錫杖經一卷

堅心政意經一卷

七女經一卷

八師經一卷

琉璃王經一卷

貧窮老公經一卷

三摩竭經一卷

萍沙王五願經一卷

五苦章句經一卷

淨飯王般涅槃經一卷

さらに慧琳『一切經音義』を見ると、その順序はやはり異なっている²⁰。これのみからは何とも判断の仕様がなないが、常識的に考えれば『音疏』ではこれらの三經が近い位置にあったと見ておくべきであろうか。ここでは暫く疑いを存するにとどめる²¹。

むしろ気になるのは第五面『五苦章句經』の經題下に鈐された三顆の藏書印のうち「雙玉庵珍藏印」という印記である。そもそもこの帖には、第一面「琉璃王經一卷」の譯者「西晉竺法護譯」の行下に「南海伍氏南雪齋祕笈印」「儷筌審定」の二顆、第五面「五苦章句經一卷」の題下に「伍元蕙儷筌甫評書讀畫之印」「伍氏儷筌平生眞賞」「雙玉庵珍藏印」の三顆、第十二面の末行に「伍元蕙儷筌甫評書讀畫之印」「伍氏南雪齋藏」の二顆、さらに第十三面に「伍元蕙儷筌甫評書讀畫之印」、計六種八顆の印章が見えている。「雙玉庵珍藏印」を除いては、すべて道光咸豐間の大收藏家であった廣東南海の人伍元蕙（1824-1865）²²の藏印である。また末尾に三件の題跋が見える。二件は雙玉庵すなわち戴茜筱のもので、それぞれ乾隆癸丑（1793）十二月望日、甲寅（1794）花朝の紀年がある。最後のものは末に「琴山農部好古善鑑、出此冊相示、為識數語歸之。棠溪陳其鋌」とある。この琴山農部とは伍元蕙のことを指しているものと思われる²³。これらを総合すると、この折帖はもと戴茜筱の所藏で、後に伍元蕙の手に歸したものであるらしい。しかし雙玉庵主人戴茜筱²⁴はその藏印をなぜ第一面に鈐さずに、第五面に鈐したのであるだろうか。思うに、この法帖を伍元蕙が入手したとき、すでに相當に痛んでいたかして、再度仕立て直したのではあるまいか。その際に順序を入れ替えたもので、もとは第五面が最初に置かれていたものであろう²⁵。

²⁰ 慧琳はいわゆる「隨函音義」ではないために同じ帙に収める經典の順序を云々することはできない。しかしここで問題となった三つの經典はすべて卷第五十五に含まれている。同卷卷首の目録では、末尾に「右三十五經四十六卷同此卷音」とあり、その中で『琉璃王經』『五苦章句經』『禪秘要法經』がそれぞれかなり離れた位置にあることは『開元錄』『隨函錄』と大差ない。

²¹ しかし『開元錄』でも『隨函錄』でも、定字帙の最初は『禪秘要法經』であることからすれば、これを最初に据えた第一帖が先ずあったはずで、そこに貼り込まれた經典は何だったのかという疑問も起こり、事柄は更に不確定となる。

²² 伍元蕙はいわゆる廣東十三行の一、怡和行の伍秉鑑（1765-1843）の子で、舉人を授かり、官は刑部郎中にまで至った。その鑑識眼は高く評價されている。外山軍治「明清の賞鑑家（續）」『書道全集』第24卷（東京：平凡社、1961年）36頁。ただ外山が伍元蕙を番禺人とするのは失檢か。

²³ 冼玉清「廣東之鑑藏家」、廣東文物展覽會編印『廣東文物』下冊、中國文化協進會1941年刊、991頁、「伍元蕙」の條下に「番禺陳其鋌嘗過其聽香樓讀畫題帖」とある。

²⁴ この人物について筆者は知るところがない。識者の教示を請いたい。

²⁵ 第十三面の二行の後に「吳榮光敬觀（「伯榮」印）」の識語がある。吳榮光（1773-1843）、字は伯榮、嘉慶四年の進士、嘉慶道光間の最も傑出した鑑藏家である。伍元蕙とは非常な年齢の開きがあるが、吳榮光が道光二十年（1840）廣東に歸老したのち、伍元蕙の南雪齋で書畫を鑑賞しているから、多分この識語はこの頃に認められたものと思われる。莊申「由袁立儒蘆雁圖論吳榮光對於古畫得鑑定」『屈萬里先生七秩榮慶論文集』（臺北：聯經出版事業公司、1978年）157頁。

結語：行瑫『音疏』亡佚の背景

以上、新出の行瑫『音疏』卷二百六十四を紹介するとともに、行瑫『音疏』卷二百八十八から作られた東洋文化研究所所蔵の帖装本につき若干の考證を行った。

行瑫『音疏』の特徴は、音よりもむしろ字體の正訛にあると言える。この點はすでに以前も述べたことがあるが²⁶、可洪『隨函錄』とも共通する特徴である。行瑫は所住の會稽大善寺藏經の函次に従って（すなわち隨函）その『音疏』を撰述したのであるが、他の藏經を廣く參照しつつ藏經の字體の正非を定めることにその重點を置いた。そこに掲げられた多くの異體字は、唐末五代の寫本藏經のテキストが字體標準という點に於いて如何に混亂した状態にあったかを想像させるに十分である。行瑫は可洪と同じくその混亂状態に對して、自己の見解に基づき一定の規範を持ち込もうと努力したのである。可洪『隨函錄』は宋代にすでに刊本が出現して北方中國に流布し、遠く敦煌の地でも刊本から作られた寫本が行われていた²⁷。さらに刊本は高麗國にも流傳し、そこで忠實な翻刻本が作られた。今日我々が『隨函錄』の全帙を目にし得るのはこの高麗本に據ってである。一方、行瑫『音疏』はといえば、單行の刊本によって廣く流布することはなく、わずかに金粟山藏經のような寫本藏經に附載されるかたちで行われたにすぎない。恐らくはその通行範圍も限られていたであろう。ところが一部の藏經に附載され、他の藏經の文字を參酌できないようなかたちでは、その體例として行瑫『音疏』はその特色を十分に發揮できないのである。五百許卷の鉅帙が纏まったかたちで傳わらず、卷末音義などという行瑫『音疏』にとってもっとも不適當な形態でしか保存されなかったのは不幸と云うべきである。一旦このようなかたちで行われた行瑫『音疏』が、利用に不便なことから間もなく見棄てられるようになったこともまた見易い道理である。まして間もなく刊本大藏經の時代が來ようとしていた。寫本時代の藏經音義として作られた行瑫『音疏』の存在條件そのものが失われつつあったのである。

[注記] 小文は、幸いに中國國家圖書館の李際寧氏を通じて、新出の『內典隨函音疏』卷二百六十四の現所藏者より提供を受けた寫眞が材料となっている。圖版の1、2、4はその寫眞を利用させていただいた。私人の所藏であるため、一般の閱覽には困難が伴うと考えられるので、出来る限り忠實な録文を作り、これを附録として下に掲げる。

²⁶ 高田「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」129頁。

²⁷ 高田「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」118-121頁。

【附錄】行瑠『内典隨函音疏』卷二百六十四錄文

※注文中に更に割注があるものについては、文字が小さくなりすぎて不便なため、（ ）に入れて示すこととした。

海鹽金粟山廣惠禪院大藏 清 四紙

内典隨函音疏二百六十四 小乘經之六

雪川沙門釋 行瑠 製

中阿含經帙之四 十卷

東晉三藏僧伽提婆譯

卷第三十一

吒怱 陟嫁切 戶戈切 鋤 他兜切 切名 家使 上聲 以箕 從草

者 無粉切 枚 上綱丈切 亦一索也 綱 紺黛 上古暗切 下代音 御街縑 非

縑涼 上綱丈切 亦一索也 綱 餌去 係也 下強向切 亦作擬

仍吏 銀既切 威嚴不切 嚴毅 可犯也 亦毅 輦 非 疾捷

連展切 轡一也 邏騫 下去虔切 又去聲呼 責數 去聲呼 呵也

鬚 音聚

第三十二卷

髦 非 毛裘 下求音 斗藪 非 抖擻 振去除拂之義

沽 非 酤酒 故音一賈 肉積 子賜切 亦作積 上亦六 斫

剉 下七臥切 亦莖 掣制 非 剗割 之契切 細割肉曰一 騏

騏 非 麒麟 其隣二音 麀 非 麀鹿 上莫悲切 麀鹿也

罰罰 伐音不從寸 再再 非 再 作代切 載同用 瑋瑋

玳瑁 二音

第三十三卷

芎 非 芎藭 測愚切 窈窕 上烏皎切 迢切 烏切 亦窈 𦵏

非 消耗 一減也 遂遂 非 逐會 追逐也 栢戲

非 喜拍 普百切 從手 酒鑪 魯都切 亦作爐 史記文君當一

韋昭曰酒肆也以 切 非 認過 而振切 土邊高如一也 識別了

知也諳也又失物而記之也又 非 悌 如孕切 漢書作悌 今不取也

挾瑠 胡頰切 持也 煒燁 非 暉暉 為鬼切 下云輒切一

一光 非 眩 敗壞 娶 七喻切

第三十四卷

棖桭 非 海裝 壯霜切 一飾 修治牢固 船船 述專切

粘羊 古音 亦殺 大瓠 胡故切 尔雅康瓠器名一曰瓠（丘倒）也 又瓠

瓠之屬 棹 非 簞筏 上步埋切 下亦作楫 翁 非 蓊鬱

上烏孔切 璇 非 璇璇 皆似宣切 玉名也 又美石次玉也 亦

璿璿 璿喚 非 嗽々 傲高切 衆口愁聲 亦路嗽 呀呀 同用

櫟栢 非 櫟叢 上効交切 大桃樹也 又含歡樹也 下昨紅切 亦

藥叢 一 未寤 字從穴 非 脫不 一忽也 駝馬 毛音

亦影 豎 校飾 上交効切 字宜作 斂從玉者 非 玢玢 非 交

絡 交羅 結絡 嗽潔 上皎字 同用 抗 非 共枕 從木 默

非 以墨浣浣 澣澣澣 下五同 胡管切 以墨洗墨也

餞 非 燒殘 昨浪切 蟬蛸 代每二音 正從玉 亦從甲虫

第三十五

個 非 回顧 亦作迴 一轉也 庀庀 同用 譁說 花音 譁一

不實也 亦誘 穰穰 上汝羊切 一草下 子賜切 亦作穰 俠 非

挾長 叶音 夾也 鋤掘 上助魚切 亦作 鋤下其屈切 填下

田音 一塞 糞浞 上亦作糞 下鳥酷切 一灌 落杭 非 創治

上郎鐸切 通俗文云剔 一竹枝節也 說文作箒 械 非 陞梯 登豆

切亦 竟橙 絃街 非 因鞞 孤犬切 又玄犬切 亦作 鞞馬縵（子田）制

馬之具 一 芻豢塚 同知重切 一闕下 正用一墓釋名曰腫也 高

擁 非 便擁 於用切 加土 一田 支 覺分

第三十六

膺 非 如鷹 億凝切 煩猥 鳥罪切 一雜 環 非 為

鎖 亦作環 逮 非 逮 代音預也 獲也 分 非 纖芥 介字

同微 細也 畜牧 目音一養 滋生也 滂沛 上普傍切 亦滂下 環

貝切 亦作諸 燮 非 燮不 一他易改也 即一化 不從門入也 即一

屨（仙叶）屨義然不取又上句云着白衣之言与前着袈裟之理有似相違

怒 非 怒 書慮切 香陰 受胎具 三緣也 摘 非 指摘

汀的切 指也 紕 也舉也 斥也 奸反 古寒切 是靡 於容切 亦

爪擗 同上 挑壞 創開 楚霜切 亦瘡 煒燁 上為鬼切

下為輒切 非 捫摸 門音 椎身 直追切

三十九卷

吹攪 交巧切 輕 非 桴乳 上拍拚切 一擊 鑽搖取醍醐之

用字從 手作 餘 非 貪味餘 下天涅切 貪食 曰一亦養作味

字得 非 不廉 飲沾切 清儉 也不貪也 擻 非 手擻

此活切取也又子活切亦撮
臍臍 非 地肥 正用 淖蜜
上尼教 齷齪 非 有穢 古猛切 藁藁藁
切和也 穀芒也 魚吠切
高略切禾 併取 卑娉切 朝刈 畜 非
未稔也 一聚 一用
儲穡 上除音下丑六切 穡華 房玉切 咄
一一積聚也 亦穡
々 敦骨切責也 榜 非 標榜 下博莽切
又多活切 表示也
殯 非 可殯 一弃斥 霏那 匪微切此云
逐也 福德行也
恕亮 下良仗 噉 非 噴數 去声 搆犖 古
切信也 責也 候

切取
乳

第四十

柱 非 拄杖 知柱 淋 非 胎牀 正用 蒿草 好
切 亦吟 亦腰媛
切 啄破 卓音 非 時暖 奴短切
亦吟 亦腰媛
藁草 高略切禾莖 逕逕 非 經歷 經
草也亦藁 涉
遊也 杵凡杵 非 孟 正用 行緯 為貴切機
織之經也 觜
觜 即委
切

已上十卷中阿含經第四帙竟

（作者は京都大學人文科學研究所教授）